



## 北海道史の先進性及後進性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道学芸大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 栗原, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00000064">https://doi.org/10.32150/00000064</a>

## 北海道史の先進性及後進性

栗 原 薫

北海道学藝大学旭川分校歴史学研究室

Kaoru KURIHARA: The Backwardness and the Precedence of Hokkaido History.

## 梗 概

最近辺境の先進性をめぐつての課題があるが、私は北海道史の場合について考察した。先づ経済、政治、文化に互つて形式即形相と内容即質料に分ち考えると形相の面では先進性を質料の面では後進性を示して居る。更に形相の先進性は時と共に後退して行つたが、質料の後進性は次第に克服されて行つた。之は中央との関聯を考える事により理解される。

## 目 次

1. 序
2. 後進性及先進性の性格
  - (1) 経 済
  - (2) 政 治
  - (3) 文 化
3. 後進性及先進性の消長について
  - (1) 形相について
  - (2) 質料について
4. 結論——その意味について

## 1. 序

北海道に來て興味を引かれる物の一つに十勝の農夫がある。彼等の算盤高い事は商人と扱ふ所無く、内地の百姓の純朴さと言う概念は当てはまら無い。所が彼等の日常生活の貧しさと來てはかなりのものである。此は十勝の農夫に於いて最も印象的な事で全道の傾向である。北海道の農村は内地の農村に比して、資本主義経済の中により多く巻き込まれて居るが、一方北海道の小作料は内地に比して高かつた。札幌の市街は堂々として内地にも稀に見る所であるが、地方の民屋は概ねいとも貧弱であつたか物置小屋か家畜小屋の様である。一方に於いては進歩的であり内地に先じてゐる面が見られると共に、一方に於いては後れてゐる面が見られる。つまり北海道には先進性及後進性の二面が見られる。内地と色々異つて居るがその違ひ様が進んでゐる面と後れてゐる面とがあつて面白い対象を爲して居る。私は此の現象を此論文で

歴史的に論じた。

<sup>(1)</sup>戦中より戦後に及んで、歴史に於ける地域的な特異性と、その互に特異な異質的な社会が相互に接触する事に依つて生じた歴史的な結果に就いての課題がある。日本の地域的な變動という現実の反映であろう。

此の課題の一つとして辺境の先進性の問題がある。<sup>(2)</sup>石母田正氏が中世に於ける東國の果した役割、ゲルマン人がヨーロッパ中世の形成者となつた事、又イギリス、アメリカが嘗ては辺境であつた事、ロシアに於ける資本主義の發達が辺境に見られる事等から、<sup>(3)</sup>中央地帯即ち古い物が残つている所に於いては、色々な歴史的制約があり、其所では新しい物が伸び得無い。辺境地方は兎に角こらう古い物から自由である。従つて其所では新しい生産様式が自由に展開する事が出来ると考えられた。又永原慶二氏は、鎌倉幕府の地盤としての東國の生産力の低さ及び半奴隷制の残存を指摘し、中世形成に於いて東國の果した役割にも関らず、後進性が見られる事を論ぜられた。<sup>(4)</sup>更に石母田正氏は領主層を三つに分けて考える事に依つて、此の問題を更に具体化された。又藤谷俊雄氏は、近世の薩摩藩に於ける中世的な社会関係の存在を指摘し、先進的な部分と後進的な部分との並存を指摘して居られる。<sup>(5)</sup>奈良本辰也氏は明治維新革命に於ける西南諸藩の勝利は第三者的なブルジョアジーの援助もさる事ながら西南諸藩に生産的中農層が發達して居た事を無視しては理解出来無いと述べられ、又遠山茂樹氏はしかし大ざつぱに言つて西南諸藩を以て中位のブルジョア的發展度の地帯と考えたいと述べて居られる。又藤間生大氏は古代権力が九州でなく近畿に成立した事情について考察して居られる。此の様に辺境の先進性、後進性は最近の課題と成つて居るが、私は近世よりの北海道について此の問題を論じた。

方法として三つの課題に分けて考えた。

第一に先進性を示した部門と、後進性を示した部門と分類し其の性格付をした。その性格付の爲に形相と質料との概念を使用した。其検討には経済・政治・文化の三

面に互つて之を考えた。社会現象は相互に關聯し合つて居り、其の一面を見れば他の面も推測し得るが、一方歴史事實の究明は蓋然性以上に及び難いので、やはり各面より別々に検討する必要が有ると思う。又其の爲にも其歴史的意味を明にする必要が有るが、此所では、其は別の課題として扱つた。経済に於いては、経済組織は形相であつて、経済生活の豊富さは質料となる。政治に於いては、政治形相は形相となり、具体的な政治の運営如何は質料となる。文化に在つては、精神形態は形相であり、文化内容は質料である。其の夫々について、先進性を示す部門、後進性を示す部門を当てはめて考へて見た。結論として先進性を示すのは形相の面であり、後進性を示すのは質料の面である。

第二に質料の後進性と形相の先進性ととの歴史的變化を見た。其の爲に第一の課題に於いて取扱つた各々の項目に付歴史的に考察した。形相の先進性は本土よりの植民活動の盛な時最も大で漸次減少して行く傾向があり、質料の後進性は漸次克服されて行く傾向がある。本土よりする植民活動の盛衰は、絶対的な量よりも相対的な量が意味がある。北海道の植民活動は、絶対的には維新後増加して居るが、相対的には維新後廣く各地に發展出来る様になつたので減じて居る。

第三に形相と質料・先進性と後進性ととの此の様な關聯の歴史的意味を考えた。此の様な關聯の生ずるのは、北海道の開発が日本史の地理的な表現としてあるので、それ自体としてあるので無いと言う事に由来すると考えた。

## 2. 後進性及先進性の性格

### (1) 経 済

北海道の開発が軌道に乗り始めたのは、近世初期日本に商業が大いに興り、海外貿易が盛に行はれる様になつた時、北海道にも若狭等の商人が来る様になつてからである。其以前、古代には蝦夷綏撫の爲、中世には罪人の流刑地として、又敗残者の逃げ場所として北海道に渡つた者は多数あつても、根を下す事が出来ず其の地に残つた者は土人と同化してしまふ様な状態であつた、商人の渡來と共に日本人が日本人として住み着く様になつた。松前氏の先祖も若狭の商人であると言う説もあり、「北島志」には武田松前氏祖武田八郎若狭商人とある。北海道では其の開発の当初から米等主食は輸入に待つて居た様であつて、其形態に於いては当初より貨幣経済的であつた。その様な事情は維新後<sup>(12)</sup>後継ぎ、以後農業が発達し主食も幾分自給出来る様になつたが、猶其等の農村は商業作物を作るに熱心であつて、内地に残つた自給自足の土

地経済的色彩はあまり見られ無かつた。<sup>(15)</sup>武裝商人である場所持の士達、松前藩の商業直營、近江商人の商業資本の卓越する商業資本時代、及び其の産業資本化、<sup>(16)</sup>維新後一種の金融資本家による近江商人等の後退、<sup>(17)</sup>ついで明治末大正に及んでの金融資本の卓越と言う現象は内地の最も先進的な部門と相呼應して起つて居る。此等は貨幣経済、自然経済の概念に対しては下層の質料となるのであるが、内地との關係は時代により異なる。

更に此等の現象の質料である経済生活について見れば、<sup>(18)</sup>近世は砂金が主な通貨であり後砂金が次第に使用されなくなつても砂金使用の名目が残つた、幕末に粗製の鉄貨である函館通宝が作られた、此等の事を見れば貨幣の流通は充分發達して居無かつた様であり、形態としては貨幣経済的であり、全く北海道の生活は其に依存して居たのであるが、その内容は貧弱なものであつたと考えられる。反対に江戸中期以後の旅行記には、松前人の生活の豊かな事、その上方或は江戸風な事が述べてあり、<sup>(19)</sup>ゴロヅンの旅行記にも市民生活の豊かさを思はせる記事があるが、全般的な庶民生活にも及ぶものかどうか疑はしい。又産業の種類も漁業・林業・鋳山業の原始産業が非常に跛行的に行はれて居るのであつて、工業及工藝が一部を除いて發達し得なかつた、此等の事は前述の事に対して質料となる。

此所に経済の面に於いて、先進性は形相の面に、後進性は質料の面に見られる事が認められる。

### (2) 政 治

國家権力が對外的には國際権力に対し、對内的には封建諸侯に対し強化され國家が強大な存在となつたのが近世の政治の特色である。中世の日本の國家権力は極めて弱いものであつたが、其が次第に強化集中されて行く所に、近世への歩みを見る事が出来る。江戸時代になると、幕府の妙みな中央集権政策に依りその歩みは安定したが、其所に猶より強い中央集権への要求が起つて來た。其は初期に於いて既に現れ始めた用人政治に於いて見られる。用人政治に依つて將軍は自己の意志を專にする事が出来、諸侯の勢力に左右され無くても良くなつた。吉宗に於ける御定書百ヶ條、足高の制は官僚政治へと進み行こうとする現れであり、又石高に應じて諸侯に金を出さしめた事も、諸侯領を含めて全國から租税を取り立てる如き制度の第一歩を踏み出したものであるが永續し得無かつた、此の様に於いて幕府はより強い中央集権政府へと進み行く可きであつたが、其は江戸時代初期に建てられた國內の安定を自ら破壊する事となり、可成の危険を覚悟せねばならず、其の様子は幕府には出来無かつた。其にも關らず前述の如く中央集権の方向に進ん

で居り、且それに伴つて官僚的なものが次第に成長して来たのである。此は貨幣経済の普遍化への方向が経済圏の拡大—村落経済から地方経済、地方経済から國家経済へとの一を來すに伴ひ起つた所の現象であり、近世的な傾向であり、此に依つて政治的な近世化の程度を計り得る。此の様な中央集権への傾向にも形式と内容、形相と質料とに分ち考えられる。

形相について考えると、國家権力の滲透し、その下に組織化される事が他の地方よりも非常に早かつた。<sup>(21)</sup>松前慶廣が秀吉より蝦夷島主として安東氏より独立の地位を認められた事、そして実力以上に優遇された事が、秀吉によつて蝦夷地が注目されて居た事、したがつて或意味で國家権力の伸び來つた事と考えられる。江戸初期幕府は財政困難となると、北海道の産金に着目した事があつたが、強ひて手を出さ無かつた。中期になると、当時の経済的な行きづまりを打開せんとして各地の新田開発が論ぜられたが、其の規模の大なるものとして北海道開発の意見が起つた。天明年間になつて田沼意次が工藤平助の意見を採用して因幡沼開拓等の事業と共に、北海道の開発を計り、天明五年より調査が行われたが、六年將軍家治が病床に就き意次が退けられて中止された。やがて松平定信が老中となり消極的な政策を取つたので、蝦夷地経営の計画は立ち消えとなつた。中央集権への傾向と、其れに依つて生ずる危機を恐れ祖法を墨守して政治の安定を保たんとする傾向との複合の中に江戸時代の政治が一進一退した状態を示すものである。所が意次が退いて二年目の寛政元年蝦夷乱が再び起り、國防上の観点から官營の御救貿易が多忠籌の建言を容れて行はれた。寛政三、四兩年に互り調査も共に行はれ、露人の南下、松前藩の不取締、其の無力が分り寛政十年更に調査を行ひ、十一年東蝦夷地を幕府の用地として経営する事となつた。<sup>(25)</sup>やがて全北海道が幕府の手に收められた。所がやがて外國船が現れ無くなつたので文政四年松前氏に蝦夷地を瘞し與えられた。更に安政元年幕府が箱館開港の爲、箱館附近を收めて箱館奉行を置き、安政二年國防上の理由で蝦夷地を併せ管轄する事となつた。かくて明治維新に及び榎本武揚等の最後の拠点となつた。箱館奉行は外國奉行、勘定奉行より轉じ來り、又箱館奉行より其等の職に轉じて行き、又は兼任の例多く重職であつた。幕末維新政府の箱館裁判所を追つて幕臣等が北海道を最後の拠点としたのは一は位置の関係もあるが一は幕府の勢力が滲透して居たからでもある。<sup>(32)</sup>維新政府からも蝦夷地の経営が頗る重視された事言を待たない。

かくの如く中央勢力の北海道への滲透は比較的早い

であるが、其の様な滲透は形式的にさうだつたので、具体的に北海道の土地及び人々に対して中央勢力が滲透したかと言ふとかへつて少いのである。前松前藩の時代に於いて藩の権力は極めて弱く、<sup>(33)</sup>内部原野に入つて自由に耕作して歸つて來無い百姓や、海を渡つて勝手に耕作して收穫を終つて歸つて行く外國の百姓が居た。又蝦夷の管轄は唯貿易の独占權の割當に過ぎないで、其に対する支配權とは言ひ得ないものであつたし、<sup>(34)</sup>又キリスト教が内地で迫害され出してから盛になつて行つたといふのも、藩の統制力の弱さを示すものである。場所の請負が始ると、場所の経営、土人の介抱は全く請負の思ふままになつて行き、幕府直轄となると出先官憲独断の専行が現れた。維新後も内地並の徹底した政治を行う事が出来無かつた。

政治に在つても、形相は先進的、質料は後進的であつた。

### (3) 文 化

精神的な面では、精神形態が形相、文化内容が質料となる。

近代的な精神形態としては、合理的、計量的、実証的である事、企業的精神に満てる事が挙げられる。江戸時代から明治以後迄孤立的、類同的、個性抑圧的なものが有力でありながら、其の中に合理的、計量的、企業的な精神が漸次伸びて行つた。北海道に於いては近世的な精神形態が早くより強く見られた。

創造的精神については、松前道廣等は良い象徴である。<sup>(40)</sup>彼は松島を見て蝦夷地の雄大さを誇り、馬を談じては夷狄を討伐する事に及び、地北寓談では赤夷と通じて日本を支配せんとしたとしてある。此の様な人間の出る背後には廣範な、積極的、創造的な精神の存在が考えられる。その現れとしては江戸時代内地は地理的に固定の状態であつたのに、蝦夷地では、北方東方に漸次探險が行われ開発されて行つた。長くて六十年短い時は一年を置いて新しい場所が開かれて居る。此は此の地の企業的<sup>(41)</sup>精神の現れであると共に企業的<sup>(42)</sup>精神を鼓舞する源となつた。産業技術の改善は内地でも行われたが、北海道に於いても顯著なものがあつた。漁法の改善、其と相表裏して場所経営の大規模化、又種痘が最初に取り入れられ、<sup>(43)</sup>幕末に於ける箱館型造船に成功した様な創造的な面に於いても企業的<sup>(44)</sup>精神を見る。又ゴロヴニンの日本幽囚記にも日本人の此の上も無い好奇心、色々の事を根ほり葉ほり知ろうとする強い好奇心を書いてある。又山組人に托して清の官吏と文通した藩士も居た。この様な傾向の反証となる儉約令、法度、先例尊重、儒学と言つた様なものは一應此の地に於いても見る事が出来るが、其は当時

の日本に支配的であつた形態が其の一部分である此の地  
 於を掩つて居たので、形式的である場合が多い。儉約令  
 について見るに十回出されて居るが、其はおほむね中央  
 の儉約令に副つて調子を合されたものであつた。内地諸  
 藩の例<sup>(49)</sup>えば出雲藩の如く独自の立場で早い時期から儉約  
 令の出されて居たのと異なるものがある。又藩学<sup>(50)</sup>微典館の  
 教科書に史学関係が多い事も、儒教が形式的である事の一  
 つの証とならう。

合理的、普遍的的精神については、<sup>(51)</sup>ゴロヴニンの幽囚記  
 に箱館奉行が誠意を面に現して、ロシア人も日本人も同  
 様に人間であり、人間として取扱はれねばならぬと言う  
 事を長々と演説すると、其を聞いて居た多くの役人達も  
 それに同意しゴロヴニン等を同情する色が見られたとし  
 て居るが、此の様な人間の発見と言う事が北海道に於い  
 てあつた。其の様な人間は髪の色とか顔の形とかには関  
 し無い抽象的なもの合理的なものであつた。又蝦夷物語  
 に一銭なりとも利得があれば頭をたたかれ面に唾を掛け  
 られても厭わぬと言う様な状態に卑賤の者のみならず、  
 松前藩の家中も皆そうであると言つて居る様なものは合理  
 的精神の現れである。その反対に神佛への崇敬が見られ  
 る。享保三年に福山以外に堂社百五十(寺院を除く)<sup>(52)</sup>あり、  
 此を福山以外の室永四年の人口11769人に割り当ると  
 80人に付一堂社となり、この外に寺院があるのである  
 から宗教が盛んであつた事は知れるが、此は此の地方が  
 自然現象に支配される事農業よりも著しい漁業が主産業  
 であり、かつ此の地方が大旨発展的動的形態を取り社会  
 が常に動いて居た爲、人は物をありのまま見ようとする  
 よりは、その原因によつてものを理解しようとした。し  
 かも知識が充分で無かつたので宗教的なものが栄えたの  
 で、それにも関らず、精神形態に於いて創造的、合理的  
 であつたと言う事が出来る。

所が内容である質料の方を見ると文化財に於いては、  
 内地に比して先進的であるとは言えない。印刷が始つた  
 のは嘉永年間福山<sup>(53)</sup>で白文孝経が出版されて以後であり、  
 明治六年箱館は人口二万五千人であつたが書店は一も無  
 かつた。松前藩に学校が設けられたのは文政四年微典館<sup>(54)</sup>  
 以後である。又旅行者から書籍などよむものまれなりと  
 言われて居る。明治以後文科系の上級学校が最近迄作ら  
 れなかつた事は北海道の後進性を示すものである。かく  
 の如く質料としての文化財に於いては、反つて遅れて居  
 る。

文化の面に於いても、質料に於いては後進性、形相に  
 於いては先進性が見られる。

註

(1) 日本中世史研究の一動向

- 井ヶ田良治 史林 33~4 81~91  
 昭和18年度古代史研究の回顧と展望  
 石母田正 藤間正大日本庄園史 457~8
- (2) 中世成立史の二三の問題 日本社会の史的究明  
 石母田正 35~71
- (3) 同上 65
- (4) 日本に於ける農奴制の形成過程 永原慶二 歴史  
 学研究 140 1~12
- (5) 古代末期の政治過程および政治形態  
 石母田正 社会構成史体系 7
- (6) 薩摩藩の社会組織と専賣制度 藤谷俊雄 日本史  
 研究 6 2~21
- (7) 明治維新革命の主体性について 奈良本辰也  
 維新史の課題 22~29
- (8) 日本絶対主義成立期の問題 遠山茂樹 史学雑誌  
 58-3 77~86
- (9) 政治的世界の成立 藤間生大 社会構成史体系  
 1
- (10) 新羅之記録 市立函館図書館刊行 15  
 右大將朝頼郷進苑而追討奥州泰衡御節、從猿部津輕  
 人多逃渡此國居住……亦実朝將軍之代強盜海賊之從  
 類數十人擱取下道奥州外之茨被追放狄之鳥渡党云者  
 混等末也  
 諏訪大明神画詞 諏訪史料叢書 第二卷  
 渡党ハ和國ノ人ニ相類セリ 但鬢髮多クシテ遍身ニ  
 モヲ生セリ 言語俚野也ト云トモ大半ハ相通ス 此  
 中ニ公超霧ヲナス術ヲ傳ヘ公然隱形ノ道ヲ得タル類  
 モアリ 戰場ニ望ム時ハ丈夫ハ甲冑弓矢ヲ帶シテ前  
 陣ニ進ミ婦人ハ後塵ニ隨ヒテ木ヲ削テ弊帛ノ如クシ  
 テ天ニ向テ詭呪ノ体アリ 男女共ニ山壑ヲ經過スト  
 云トモ乘馬ヲ用ス 其身ノ輕キ事飛鳥走獸ニ同シ  
 彼等カ用ヒル所ノ箭ハ遺骨ヲ鍍トシテ毒藥ヲヌリワ  
 ズカニ皮膚ニ触レバ其人斃セスト云事ナシ 根本ハ  
 酋長モナカリシヲ……………
- (11) 北海道經濟前史 南鉄藏 法経会論叢 8  
 建部重之傳 八幡町史  
 敦賀港ヨリ米増等諸物貨ヲ松前ニ輸送ス……………開墾  
 地ニ要スル米穀、塩、噌、繩筵等一切ノ物質ヲ輸送  
 セシメ……………  
 蝦夷実地檢考録 市河十郎  
 抑信廣の始めて渡りし時……食料に缺乏し春になつ  
 て……彼は商船にて漸次につきて松前の岸に着きけ  
 れば急ぎ船に行きて米醃菜等を買ひ得て……
- (12) 新撰北海道史第二卷通説一 高倉新一郎  
 220~221  
 昔の北海道は主食たる米は勿論、衣服家具其の他日  
 用品の大部分は、之を他國に仰がなければならなかつ  
 った。……後には何らかの理由で交易船が行か無い  
 と「商船一艘も不參候へば、涸罷在候」津輕一統志  
 卷十と嘆かなければならなくなつて居る。225  
 移入品は米を第一とし……米は享保の初頭一箇年  
 の移入高三万石余で……此の外松前藩が酒田で、幕  
 府から年々米四千五百俵の拂ひ下を受けて居た。  
 (享保初年より約十年前の室永四年十二月に松前

の人口15848人(福山秘府)二十年後の寛延二年に21107人(福山秘府)

(13) 新撰北海道史 第四巻 通説三 507~511

(14) 北海道拓植史 高倉新一郎 204

(15) 商人の漁業家化—北海道の開発と近江商人—菅野和太郎 経済論叢 30—5

彦根高等商業学校調査研究第八輯

新撰北海道史第二巻 102~108, 112~120,

180~186, 227~232, 340~347

明治維新前北海道に於ける日本資本主義の先進性

白山友正 社会経済史学 15—2

(16) 松前蝦夷地に於ける近江商人の活躍と其の没落原因 太刀川

彦根高等商業学校調査研究第十三輯

(17) 新撰北海道史 第四巻 737~754

北海道の銀行の発達とは三十六年末には銀行数十五に達し四十二年には本店十四府縣銀行支店十六銀行数九に達し一般府縣に比し銀行の発達も中央銀行の進出も早い。又四十年よりの不況にもかかわらず、四十年には富山の四十七銀行の支店が小樽に、四十一年に日本商業銀行の出張所が室蘭に出来、四十年には函館銀行は資本金を増加して居る、

(18) 新撰北海道史第二巻 231~232 743~744. 503~504

陸奥日記 魚澄子瑛 文政元年 五月九日……銭の通用長百文の昔より兩替の法六十目に四貫六百廿文十五兩当一貫八拾文なり 文政の頃重量で金が貨幣として使用されて居た事が分る。又銭が金に比して高かつた事が分る。

(19) 東遊記 平秩東作 天明甲辰初夏(四年)貧賤の者も蒲團式つしきて臥す 大方は蒲團三つ大夜具かいまきにて臥し侍り……町人百姓の風儀質素なり衣服は木綿にてきぬ紬をきる事至りまれ也 居宅諸道具などは不自由なき様子つくり江戸などの目にて奢と思はる事多し 婦人は常に能事をつとめ……時々の時世染など貯へ持て至てはれる会合には我をとらじと着かざる事三ヶ津にかはる事なし……居宅はいずれも梁間五六間より八九間のもあり……間所も座鋪向は天井黒(部)杉壁丸太長押床塗欄付床などある家あり……其外台所納戸など家手廣なる事江戸なとよりまさり……大蔵多し……すへて豊なる事京江戸といへとも多く譲らず……よるす江戸なとより丁寧なり 枕夜具重箱の如きものも会津はいやしとて不用多くは能州和島の塗物を用ふ……(鮭漁の時)三ヶ月程の雇賃鳥目十三四貫より人少き年は十八貫程にてやとひあぐ也 一日二日の雇ひは一日に一貫文……浜辺にすたりたるものを拾ひあつむる寡婦のたくひもまた八九両の金子をは得る 佐渡越後なとより身上もつれたもの来て借屋をかり油断なく働く者は三十兩四五十兩の金子を三ヶ年程に貯へて國へ帰る 一ヶ年の店賃と此時三ヶ月ほどの店賃と大体相ひとし 店賃は江戸繁花の地の店賃と大分は同じ

東遊雜記 古河辰

入松前雜記 木村謙子虚

にも「此度江戸を出しより家居人物言語ともに揃ひてよき所は江指町と松前の城下に及ぶ所更に無し……富饒の所なるゆへ各々美をかざる風と見え侍りしなり」(東遊雜記)或は松前鉄五郎の門が銅葺横二十枚立十四枚なるに驚いて記し、又その服装の華美に驚いて居る、(入松前雜記)

以上の如く松前の富有は掩うべくも無いが旅人の目にとまつた生活は近江商人等外來の富有にとまつて一般庶民は別の様に思われる。此所に東遊記に記された鮭漁の勞賃の高い事(居消費奉行人の研究 森嘉兵衛 日本史研究12 に見える寛政天明頃の年給金相当分は4貫目~6兩である) (又入松江雜記に女給正月より五月迄四貫文とあるのもやや高い様である。)が注目を引くがしかし物質の高い事(入松前雜記によると玄米壹斗津輕二而廿四文位の時松前七拾三文 酒壹樽式斗入津輕二而壹貫二百文 松前式貫五百文)という事を考えなければならぬ。むしろ東遊記の仕立やというものなし……菓子屋なし……干菓子餅菓子下品はうるもの有 能々家々に手製にす よき菓子屋なし という記事に興味を引かれる。

(20) 日本幽囚記 ゴロヴン 井上満訳 下 126~127

目の前にあつた松前は日本では最も貧乏な町の一つになつて居るが、われわれは上下を通じて多くの日本人、ことに婦人達が絹の着物を着てゐるのを見た。ことに祭日には庶民でさへも高價な絹地で仕立てた服を着飾つてゐたのである……牢獄の様な場所に監禁されてゐた頃には、……囲爐裏は赤い銅ではり、灰かきも同じ金属で作つてあつた。

庶民でさへもについては八月中旬の祭日に男兒は全部城内に集つたが、それは立派な衣裳を着せる家庭の子弟ばかりで、粗末な着物の子供は恥しがつてこの会に出ないさうである(中巻~98)という記事を併せ考えねばならぬ、

(21) 新撰北海道史 第二巻 86~88 (22) 同上  
126~129 (23) 同上 281~295 (24) 同上  
304~310 (25) 同上 315~320 (26) 同上  
400~402 (27) 同上 450 (28) 同上  
539~541 (29) 同上 620~624 (30) 同上  
624~627

(31) 新撰北海道史三巻6~7には清水谷公考の蝦夷地鎮撫の建言には徳川莊内等の者共彼地に安居仕事は難相成……不軌の輩御座候は籍に賊徒の聲援もなし可申も難計とある。これは蝦夷地を旅行し事情にくわしい岡本文平の意見である。又北海道史要 竹内運平 184 は箱館裁判所の吏員中九割乃至三分之二は旧幕吏であつた。又同書 217 によれば後年榎本自身の談話では佐渡、対馬を取つて朝鮮征伐、布哇行等色々の議の中蝦夷開拓に決したとの事である。

(32) 新撰北海道史第三巻 5~13, 77~80

(33) 福山秘府 松前廣長 北海道第五巻史料200

亀田奉行への書付の中 加作仕廻候ハバ 面々在所

エ出 越歳候様=急度可中侍事(元録四年未四月)  
これはこの様な禁令を出さねばならなかつた事情を  
思はせる。同じ書付に 昆布取場エ 他國ヨリ直=  
舟來候ハ 人遣其船留置 様子早々可申越候 又親  
類=逢候トテ他國ヨリ來候者有之ハ 其者帰候節  
松前エ遣シ可相返候 若当領ノ百姓親類=逢トテ、  
他國行儀 子細相尋可差遣候事 等を見れば松前を  
經ずに直に他領と往來する百姓が居た事が分る。又  
自他國ノ者、奉行名主=無断有付候者 といふ條も  
あり他國者で自由に住み着く者もいた様である。

- (34) 新撰北海道史 第二卷 213~214 (35) 同上  
103 (36) 同上 391~392 (37) アイヌ政策  
史 高倉新一郎 89 (38) 同上 191, 139, 190
- (39) 例えば 岩村長官施政方針演説書(新撰北海道史  
第六卷史料二 650) に荒陞村落=至テハ終年一回  
モ、巡察ノ警邏ヲ見ルコト無ク、非常ノ変難=遇フ  
モ、警察ノ保護ヲ受クルコト能ハザルノ状態が述べ  
られて居る。
- (40) 新撰北海道史第二卷 320~321
- (41) 地北寓談 大原左金吾 北門叢書第三册(45)同上  
205~210
- (42) 新撰北海道史第二卷 104 (43) 同上  
746~749 (44) 同上 812~813  
787~788 (46) 日本函囚記 上 213~215  
285~294 (47) 新撰北海道史第二卷 318~319  
(48) 同上 204~207 252~253 553~554
- (49) 出雲國國令首卷三 儉  
松前藩は享保六年(1724)よりであるが出雲藩は寛  
文六年(1666)同七年、同十二年、延宝二年(167  
4)という様に続き元禄十五年(1702)迄に十三回  
出されて居り、又其の内容も遙に眞劔なものがあり  
藩及び藩士の経済的困窮より出発したもので單なる  
観念的なもので無い事がうかがわれる。松前藩のは  
享保九年の吉宗の儉約令、又定信の(1787~1793)  
の政策に應じて行われて居り、その中間に行われた  
ものもあるが殆んど実際には行われ無かつた。
- (50) 大日本教育史資料第巻 旧館藩 728丁
- (51) 日本函囚記 上 274~275  
其外風呂にゴロヴン等を入れた後で獄卒等が入つ  
たので日本人はキリスト教徒を毛嫌したり卑めたり  
してゐない事が分つた(234) と言ふ様な記事があ  
る。
- (52) 福山秘府 松前廣長 109~110
- (53) 同上 135
- (54) 新撰北海道史第二卷 801
- (55) 同上 第三卷 639, 723  
明治七年魁文舎なる書店開かれその中に新聞縦覽所  
をも開設した。
- (56) 新撰北海道史第二卷 550, 794  
大日本教育史資料 第巻 727丁
- (57) 東遊記 立松懷之  
書籍などよむもの生まれながらも 学問あるものを  
尊ひ道を重んずる様子也 家々に見合なとあつて書  
物など講ずる者あればことの外に尊敬する体なり

### 3. 後進性及先進性の消長について

#### (1) 形相について

北海道史に於いて先進的なものは、形式的なもの形相  
であるが、維新前が維新後よりも先進性がより強かつ  
た。

先ず経済について之を見るに、最も高度の形相である  
貨幣経済について、内地に於いては漸次其度を高めて行  
つたが、北海道では江戸時代に反つて其への依存度が高  
かつた。前述の様に江戸時代には多くの生活必需品就中  
主食の米は全く輸入に待つて居たに対し、維新後農業の  
発達すると共に、其等農業は商業作物を作る事が多かつ  
たが、猶内地の自給自足の土地経済的傾向をもたらした。  
殊に明治末より酪農が奨励され酪農が増加した事は  
一層この傾向を強めるものである。又商業資本、産業資  
本については先進的傾向を示したが、金融資本時代に入  
るについてはそれ程でも無い、要するに経済については  
維新前の方がより先進的であつたと言う事が出来る。

政治については、幕府の権力が早く伸びて來たが、國  
家権力の伸長と言う面からはその傾向を持続したが、よ  
り低次の形相である自治の発達と言う面から見れば維新  
後内地に遅れた。明治十三年四月区町村会法が發布され  
るや、北海道は新開地であると言うので除外された。特  
に函館は之を遺憾として請願し区会設置を許された。  
二十年頃より自治運動が盛となり、明治三十二年十月よ  
り区制施行され、三十三年七月より一級町村制が施行さ  
れ、区町村会が設けられた。併し議長は区町村長であり  
訴願の規定無く予算不適當と認められれば監督官廳より  
削減され、内地の市町村制に比して自治の程度が低かつ  
た。二十五年四月二級町村制が施行されたが其は町村会  
無く、更に二級町村制も施行されない地方もあり依然と  
して戸長役場制度が行われた。明治二十一年帝國憲法の  
發布に際し北海道は沖繩縣、小笠原島と共に除外例とし  
て帝國議會への議員選出権が認められず、三十三年札幌  
小樽・函館に於いて、三十六年には全道より衆議員議員  
を選出する事となり、大正七年になつて貴族院多額納税  
者互選規則が北海道に施行された。北海道会設置の要望  
も二十年頃から続けられたが三十四年三月に至つて北海  
道会法が發布された。しかし北海道会は其権限府縣会よ  
り少く、北海道はまだ一の自治体として認められるに至  
らなかつた。政党的発達も著しく遅れ、大正に入つて活  
潑となつた。明治初年の自由民権運動は北海道に於いて  
は顯著でない。政治の面でも維新後の先進性の後退が見  
られる。

精神形態について見る時、全般を通じて北海道では企

業的、合理的、普遍的的精神が見られるが、維新後にはかへつて個性抑圧的な傾向、例えば小作人に対する日常生活の干渉が見られる。就寝の時間を規定し其後の消燈、喫茶、履物の制限、衣服は寒暑をしのぐ程度にせよとか江戸時代の慶安の御触書に類する例もある。又有島武郎や島木健作の作品に見られる否定的な人世観も企業的精神の衰微を物語るものである、精神形態に於いても維新後に於ける先進性の後退が見られる。

## (2) 質料について

全般的に質料の後進性が認められたが、次第に時と共に後進性は克服されて行つた。

経済については、貨幣に於いても最初は砂金<sup>(74)</sup>が使用されて居たのが、次第に一般的な通貨が通用する様になつた。此はそれ丈貨幣の使用が増加し経済の内容が充実して行つた事を示すものである。開拓地の生活が漸次豊になつて行つた事は古老の良く語る所である。礼文香深村に於いて提燈の使用され出したのは明治三十年頃からで、其以前は手製の代用品が使われた、又経済の総量も漸次増加して行つた事は人口の増加にも現はれて居る。元祿十四年人口約二万、天明の頃二万七千、嘉永末年には六万以上、安政中和人地の人口八万六千、明治六年十六万八千、明治二十六年五十六万人明治三十六年百七万七千、大正二年百八十万三千、昭和元年二百四十三万七千であり著しい増進が見られる。経済の質料の後進性は漸次充実されて行つたと言える。

政治の内容に就ては、政府の統制力が隅々迄及ばなかつたが、次第に強化されて行つた。蝦夷は近世初期は政治的に独立の状態<sup>(75)</sup>で唯貿易の対象であつたが場所の経営が進むと共に請負人に介抱され其統制に服する様になり維新後は大名の支配した社会組織を廢し政治的には一應和人と區別され無くなつた。それ丈政府権力が及ぶ事となる。或はライマンによつて大名の様であると評せられた場所請召人が明治維新後も尾を引き乍ら廢止された事は亦同じ動きを示すものである。

文化の質料的な面文化財についても、漸次その後進性が克服された事が言える。教育についても<sup>(76)</sup> 徴典館設置以來加速度的に充実して來たし、印刷出版についても同様の事が言える。

## 4. 結論—その意味に就いて

北海道の歴史は形相としての面は内地に比し先進性が見られるが、その先進性は北海道が辺境の第一線<sup>(77)</sup>で無くなつてから次第に弱まつて行つた。又質料の面では後進性が見られるが此は時と共に克復されて行つた事が結論される。

中世の東國、維新の西南諸藩に見られる先進性後進性が同時に存在する矛盾も形相と質料に分けて考える事により理解されると思う。

古代を形成したのが当時の金属文化地帯の辺境であつた近畿であり、中世、明治維新も亦辺境の力で成し遂げられたのは、その土地の形相の先進性の後退と質料の後進性の克服との調和された時起つたのであろう。近畿地方が長く日本の中心であつた事は日本自体が辺境であつた事で説明出來よう。

では質料と形相の不一致は如何にして起るのか、其答は辺境が中央との關聯の下に在ると言う事である。北海道について見るに北海道の開発それ自体が日本の近世の地理的な表現であり、日本本土の近世的要素により北海道が弱<sup>(84)</sup>かれた。宮本又次氏の調査によれば大阪商人の蝦夷貿易で得る利益は幕末に年々百万兩を越えて居る。此様な事実が北海道開発を行わしめ菅野和太郎氏の説の如く近江商人が本道開発上重要な役割を演じた。又高田屋嘉兵衛や松川弁之助の如く開発の爲特に顯著な役割をした者が多く元祿十四年秋九月に総人口二万八十六人中千八百三十六人の旅人袖人が居り、家康の黒印に一志摩守仁無断令渡海賣買仕候者於有之急度可致言上事とあり代々同様のものを貰つて居るが、此は入國者が多かつたからであり、鮮血遺書に見られる聖カルバリヨ、リダツシヨが津輕へ入れないで松前に入つたのも其の爲である。此は開発の緩慢だつた初期の事である。嘉永七年に國後場所の番人隊方百七十三人中四十七人が秋田、津輕、南部の者であるが、当時の人口の増加と考え合せて見て相当の渡海者があつた事が考えられる。明治維新後に於ける入國者は明治二年の二千人を最低とし、大正四年の八万六千人を最高とし多数の入國者があつた。此の様な内地との結び付は具体的な人間に象徴されるが、社会経済文化に於いて更に深いものがあり、其の近世的要素が、中世的なものの抵抗の少い辺境に向つたので、他の爲に形相に於いて先進的となつたが、その様な内地よりの働きかけが少くなると形相の先進性は乏しくなる。此に反し質料は形相の先進性が地から芽生えたものでないで地理的な不利だとか古い残存物に災されて形相と共に先進的となる事が出來ぬが、漸次形相の先進性が乏しくなつても、其にもかかはらず充実して來るのである。

最後に此論文の論理を以てせば北海道はやがて日本史に於いて輝しい役割を果す日が來るだろうと言う事を予言出来るのである。

註

(58) 新撰北海道史第四卷 551

- 北海道拓植史 高倉新一郎 191~192 225.  
228. 249~252  
北海道移民政策史 安田泰次郎 677 692~705  
(59) 新撰北海道史第四卷 746  
同上 第七卷 248  
昭和元年に於いて猶北海道に本店を有する銀行が十四も見られる。  
(60) 新撰北海道史 第三卷 735~736  
(61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70)  
(71) (72) (73)  
新撰北海道史第四卷 29~70 (74) 同上 485  
(75) 註 (11) 註 (12)  
(76) 昭和二十四年六月香深村古老坐談会に於ける談話  
(77) 新撰北海道史第七卷年表統計 143~146  
(78) アイヌ政策史 高倉新一郎 48~52  
(79) 同上 58 (寛文九年乱後蝦夷は一從殿様如何成儀被仰懸候とも私儀は勿論孫子一門並うたれ男女に不限遊心仕間敷候事 等の起請文を出し松前の支配権を認めた。) 74~88, 138~140, 232~294  
(80) 同上 418~423  
(81) 來曼氏北海道記事  
新撰北海道史第六卷史料二 345  
(82) 新撰北海道史第二卷 793~799  
(83) 同上 801  
(84) 日本近世商業史研究 宮本又次  
(85) 商人の漁業家化 菅野和太郎  
経済論業 30—5 彦根高商調査研究 8  
(86) 新撰北海道史第二卷 505・682  
(87) 福山秘府 松前廣長 新撰北海道史第五卷史料二 134~135  
(88) 同上  
(89) 鮮血遺書 聖カルベリヨ、リダツシヨの致命(青森縣史第一卷元和七年頃)  
久保田といふ所より津輕に渡らんと思ひしに商人のみ従來卷を渡し他の旅人に渡さず……一の工夫を回し一旦蝦夷に入り時を得て津輕に渡らんと思ひ……当時蝦夷……数多の鉞夫彼地へ渡る最中なりしかば師は信者を語らひ鉞夫となりて往來卷を求め  
(90) 藤野家文書 番人稼方人数調子書 嘉永七寅年番人稼方人数調子書クナシ  
(91) 新撰北海道史第七卷年表統計 150~152

## 幕末、明治初年における西洋史研究

高 橋 功

北海道学藝大学釧路分校歴史学研究室

Tsutomu TAKAHASHI: On the Study of European History in the Period of Late Yedo and Early Meiji.

この論文の趣旨とするところは幕末明治初年において、西洋史研究がどんな観点から進められ、またそれがどんな時代傾向の反映であるかを考えて見ることにある。歴史研究は過去の事実を取扱う学問であるが、それぞれその時代の問題と密接なつながりを持つものであり、研究者の問題意識とその解決の見通しが自ら歴史研究に滲み出て来ることはまぬがれない、むしろそれが現実であればそれだけ研究が緻密となり、透徹し、それぞれの歴史的意味を担い得る。幕末明治初年は日本において最も動きのはげしい時代の一であり、特に西洋観の著しい変化は西洋研究に大きな影響を與えるものがあつた。

江戸時代における鎖國政策は、封建制度下、儒教的教養に基く爲政者の文教政策と相まつて、西洋史研究に対し極めてうすい関心しか持つことが出来ない理由となつ

た、儒学者として高い教養を持ち珍しくも西洋研究に関心を持つた新井白石は、キリスト教の傳道が單に植民地拡張の手段であるという豊臣秀吉以來の一般的な見解が誤りであり、オランダ人が簡敵ポルトガル人を陥れるための造言であつて、「謀略の一事はゆめゆめあるまじき事」が理解されたが、「所謂形而下なるもののみ知り形而上なるものはあづかり知らず」として、西洋文化の本質にまで考えつくしてゆく態度を取らなかつた、佐久間象山の「東洋道徳、西洋藝術」の國策論は幕末に至るまで終始變らない知識階級一般の常識であつた。關学者がオランダ語によつて攝取した西洋の科学は「発達的に視察すれば必要が誘導した学問であつたから学問の應用方面が先づ講ぜられ、基礎学又は基礎研究は寧ろそれに附随し、若くはそれに刺戟誘導せられて発達した観がある」といわれている。歴史、法律、経済等の学問はやゝもすれば幕府政治批判の温床となる傾があつたから、幕